

(2006 年度松山大学教育研究助成プログラム実施報告書)

## 「まつやま灯明ウォッチング 2006」実施報告

—— 大学発・まちづくりイベントの企画・運営を通じた  
地域資源の調査研究とネットワーク化の試み ——

甲 斐 朋 香  
佐 野 勝 久

### 目 次

はじめに

1. 地域特性
2. 本プログラムの概要及び趣旨
  - 1) 趣 旨
  - 2) 2006 年度イベント概要
3. プログラム運営の体制及び過程
  - 1) 運営体制
  - 2) イベント実施までの過程
  - 3) 地域への働きかけ
  - 4) 他地域における事例調査
4. 分析—成果と課題
  - 1) 学生に対する教育的効果
  - 2) 大学と地域との連携・ネットワーク形成

### は じ め に

本稿は、2006 年度松山大学教育研究助成を受けて実施した「まつやま灯明ウォッチング」の実施報告書である。研究者が同プログラムをはじめて実施したのは 2002 年度のことであり（当初は伊予銀行寄附講座「まちづくり学」の一環として位置づけられていた）、2006 年度は 5 年目のイベント実施となっ

た。手作りの灯明を用いてあかりの地上絵を描くというこのイベントは、障害の有無にもかかわらず誰でも比較的容易に作業に参加でき、達成感を共有することから、異業種・異世代の参加者の自然な交流を促す効果もあり、まちづくりのツールとしても活用できるものと思われる。また、アートNPOとの協働により、アートをコミュニケーションのツールとして学生達が手作りで複数の児童画からグランドを画面にした灯明アートへとまとめていく編集作業を行い、想いをかたちにまとめて行く過程を体験することで創造性と協調性を育むという効果も期待できよう。

(執筆：甲斐朋香・佐野勝久)

## 1. 地域特性

愛媛県松山市は、2005年1月、北条市および中島町との合併により、四国唯一の50万都市となった。市内には、愛媛大学、松山大学、聖カタリナ大学、東雲女子大・女子短大といった複数の大学があり、近年では、「GCM 庚申庵倶楽部」「M スターターズ」など、学生による社会参画活動で注目を浴びるものもいくつか出てきた。行政の側でも、松山市が、2005年7月に、地域再生計画（「まちを知り、愛します松山」俺たちにできるまち再生計画～『大学生とNPOの融合』への仕掛け～）の内閣総理大臣認定を受けるなど、まちづくり



写真：NPO 法人「GCM 庚申庵倶楽部」活動風景  
(公式 HP <http://www.koushinanclub.com/> より取得)

の新たな担い手として、大学生のマンパワーへの期待が高まりつつあるといえる。

松山大学は、創立80余年の歴史を持つ私立大学であり、現在、経済・経営・人文・法・薬の5学部6学科を擁している。学生総数は約6,500名である。県内出身の割合が非常に高いことから、学生間では大学入学前の人間関係がそのまま維持されることも多く、新たに交友関係を広げることへの積極性はやや弱いとの指摘もある。大学が比較的小規模であることと、教員の研究棟が学部別に分かれていないことなどの要因により、学部間の壁は比較的薄い。

大学の近隣一帯は、愛媛大学、愛媛県立松山北高校、松山市立勝山中学校、同清水小学校（余裕教室は「生きがい交流センターしみず」として活用されている）など、教育機関が集中している。また、市役所や商業集積のある「大街道」までは自転車で15分程度と、まちなかにも非常に近接している。ただし、市中心部との間に「大街道」や「平和通」の大きな道路があり、また途中で城山を迂回しなければならないため、実際の距離よりも若干大きな心理的な隔たりが感じられる。

## 2. 本プログラムの概要及び趣旨

### 1) 趣 旨

本プログラムは、学生と地域内外のまちづくり関係者との協働によるイベントの企画・運営を通じて、地域資源の発掘および「協働型まちづくり」に重要なネットワークづくりに資することを目的としている。

企画を実現させるにあたっては、さまざまな人の協力が必要となるため、学生たちは地域資源を発見し、交渉を行って、助言や協力を仰がねばならない。学部や学年はもとより、世代や職種などの違いを越えてひとつの企画を実現するという体験を通じ、コミュニケーション能力を養ったり、地域社会への関心を高めたりすることが狙いである。

また、会場設営の作業は、障害の有無にもかかわらず、異業種・異世代の

人々が比較的容易に参加でき、達成感を共有できるものであることから、自然な交流のきっかけづくりとしても一定の効果があるものと思われる。

こうしたことから、本プログラムは、2002年度、2003年度には伊予銀行寄附講座「まちづくり学講座」の一環として行われてきた。それ以降は教員個人が松山大学独自の教育研究助成事業による助成を受けて実施するかたちをとっている。

イベントのアイデアについては、福岡市の「博多部まちづくり協議会」が主催する「博多部灯明ウォッチング」に大部分を依拠している。福岡市博多部は、福岡市の中心市街地に位置し、同市の顔ともいえる伝統行事「博多どんたく」や「博多祇園山笠」の担い手でもありながら、昭和50年代半ば頃から、人口の減少、商業の衰退、コミュニティの崩壊といった典型的なドーナツ化現象に悩まされてきた。「博多部灯明ウォッチング」は、こうした状況の下、地元住民有志と、学校・企業・行政などとの協働により、まちづくり活動の一環として行われてきたまちづくりイベントである。路地や寺社、公園、川、学校のグラウンド跡地（かつてこの地区には小学校が4つあったが1つに統合された）など、まちのあちこちを、紙袋（あるいはプラスチックコップやペットボトルの上半分を切り落としたものに、習字紙を巻いたもの）に重し代わりの砂とロウソクを入れてできた「灯明」で飾り、参加者にまちを散策してもらうというものである。

イベントの狙いは、元来、歩く速度でまちなみに触れる機会をつくり、まちの良さ、あるいは改善点を参加者に認識してもらうことにあったが、回を重ねるごとに、イベントの実施に至るプロセスそれ自体の意義も認識されるようになってきた。実施に当たっては、単純かつ膨大な量の作業が必要となるが、そうした作業は、地域内外から集まるボランティアによって担われている。作業の場は、異業種・異世代の参加者同士の出会いや相互理解のきっかけともなる。共同作業の成果がはっきりと見えるため、参加者は達成感を共有しやすい。また、イベント自体はまちをあかりでライトアップするという、きわめて

単純なものであるため、環境、地域福祉、交通社会実験など、まちづくりに関わる様々なテーマを自由に絡めることも容易である。加えて、材料は非常に安価で入手が容易なものばかりで、実施コストは比較的低い。

「まつやま灯明ウォッチング」についても、本来の趣旨からいえば、地域の中での実施が望ましいが、現実的には、道路の使用許可の問題など困難も多い。このため、現在は、イベントの会場は大学とする代わり、大学の中に地域内外の様々な社会資源を呼び込み、ネットワークづくりを図ることに主眼を置いている。

## 2) 2006 年度イベント概要

2006 年度は、

- ① 灯明アートによるグラウンドのライトアップ（手づくり灯明数千個を用いてあかりの地上絵を描く）
- ② 出店（会場設営ボランティアへの炊き出しと各市民グループの活動の PR も兼ねる）
- ③ ライブパフォーマンス（市民グループの PR も兼ねる）
- ④ 「たいせつ人フォトリレー三津から」記録展示

を柱とするライトアップイベント「まつやま灯明ウォッチング2006」を、2006 年 12 月 17 日、松山大学文京キャンパスにて開催することとした。ただし、当日は悪天候となったため、当初予定していたような、約 7,000 個の灯明を用いてのグラウンドのライトアップは実施できず、代わりに、カルフル前のピロティに 300 個程度の灯明を並べた。

また、同日、214 番教室にて、アート NPO「QACOA」と「まつやま灯明実行委員会」との共同開催のかたちをとり、香川県直島の地中美術館館長・秋元雄史氏を招いての講演会及びワークショップ「ミーツ・アーツ・オープンカレッジ」も開かれた。会の終了後、参加者たちは灯明イベントに合流し、出店やライトアップ、そして「たいせつ人フォトリレー」の記録展示なども楽しみ

つつ、灯明ボランティアスタッフとも相互交流を行った。

後日、企画・運営に関わっていた実行委員会の学生ボランティアより強い要望があがり、2007年2月4日、グラウンドを用いてのやや小規模なライトアップ（約3,000個ほどの灯明を使用）と交流会を行った。

### 3. プログラム運営の体制及び過程

#### 1) 運営体制

##### ① 実行委員会

企画・運営は、学生有志を中心に、学内外のボランティアによるものとしている。参加協力者の募集は、ゼミや講義、学外での市民活動の場での告知や、他の教職員の紹介などを通じて行った。その結果、企画や交渉にあたる「実行委員会」には、計10名程度の学生が集まった。このほか、当日の会場設営や、前週の紙袋を染める作業にだけ参加する者も、ゼミ生を中心に、学内外から、のべ50名程度集めることができた。

2006年度においては、実行委員会を計5回実施した。1回にかかる時間は、およそ1時間から、長くても2時間程度とした。1回の会議における大まかな流れは、以下のとおりである。

##### ① 灯明イベントの概要や狙いに関する説明

初回は15分程度、パワーポイントで画像などを見せつつ説明を行う（イメージをつかみ、モチベーションを高めるには、ヴィジュアルを示した方が効果的である）。以後、新規参入者が増えるたびに簡潔に説明する。初回以降は、先輩学生に説明をしてもらうこともある。

##### ② メンバー自己紹介

新規参入者のあるたびに5～10分程度行う。

##### ③ 企画会議、役割分担決定、進行状況確認

初めの2、3回で企画の内容をほぼ固めてしまい、役割分担も決定する。その後、参加者全員で毎回準備の進行状況を確認する。これらは毎回30

分～1時間程度行う。協力者となる個人・団体の活動内容などについても、なるべく簡潔に説明をし、関心をもってもらうように心がける。特に、準備期間中に関連する催しなどがあれば情報提供を行い、参加も呼びかける。

#### ④ スケジュール確認

学生の多くはアルバイトをしており、シフトは1ヶ月前に決まってしまう。そのため、なるべく早期にスケジュールを固め、何度も確認を行うことで、確実に時間を確保してもらうことが重要となる。

実行委員会に参画した学生たちに対しては、

- ・学部や学年の違いを越えて幅広い交流の機会をもたせる
- ・個々の学生からアイデアを引き出し、実現につなげるために適宜助言をする（せっかくのアイデアを簡単にあきらめさせない）
- ・ゼミや講義における学習の発展になるべくつながるように役割分担を配慮し、学外との接触の機会を作る
- ・個々の学生の経験や資質などに配慮しつつ、達成感につながるような課題を割り振る

などの点に留意した。

強制参加ではなく、自主性をなるべく尊重するかたちですすめるため、モチベーションの維持・向上が大きな課題である。特に未経験者はイベントの全体像や意義などをつかみづらい面もあるため、実行委員会の前後や作業中にも個別に声をかけるようにするとともに、先輩学生などにも配慮を促した。

ミーティングやワークショップの場合は、学内の食堂や談話室など、不特定多数の学生が集まるオープンスペースを敢えて選んでいる。このプログラムについて、なるべく多くの学生たちに興味・関心を持ってもらうためである。ミーティングやワークショップに既に参加している学生たちも、そうした場面で友人・知人に遭遇することで、イベントについて話をしたり勧誘したりするきっかけがつかみやすくなるようである。

議事録や活動報告はほぼ会合のたびごとに学生がまとめ、ブログにもアップした。また、初年度に設置したメーリングリストも、引き続き利用した。

積極的な学生ほど、既に学内外で諸々の活動に参加しており、毎回会合に出席することが難しい。一方、メーリングリストに登録されているのは、多くの場合、携帯電話の連絡先であることから、一度に送受信できる字数にも制約があり、情報を流す時間帯にも配慮が必要となる。こうしたことから、ウェブ上で折々の活動状況を掴むことができるようにし、情報の共有に役立つことを期待した。

ブログの活用は、卒業生や学外の（現・元）参加協力者との交流促進にも、わずかながら役立ったといえる。回数は少なかったものの、卒業生などからの「カキコミ」は、2006年度の実行委員にとってモチベーションの維持・向上につながったようであった。

但し、前年度のプログラム報告において既に指摘したように、「顔の見える」関係が確立しなければ、このようなヴァーチャルな手法を用いた情報共有には一定の限界があるものと思われる。実行委員会の中で、学生からは、「ミクシィ」などのSNSを活用するという提案もなされた。個人的にこうした手法での仲間集めや情報発信を試みた参加学生もいたようである。SNSは、学内はもとより地域の若年層の中に相当程度浸透しているものと思われる。にもかかわらず、フェイス・トゥ・フェイスでの呼びかけとの比較において、著しく直接的効果を発揮したとは言い難い状況であった。

実行委員会に参加していない講義の受講生などにも、折々に（講義の妨げにならないかたちで）、こうした活動の進行状況を知らせ、できる範囲での参加・協力を促す。また、何らかのかたちで活動に参加した場合は、その体験レポートを作成し、提出することも推奨している（その他、学内外で行われている講演会・シンポジウム・研究会やボランティア活動などの情報提供も普段から行っており、それらに学生が参加した場合も同様の扱いをしている）。このようにして、単なる「労働力」として機械的にイベントを「手伝う」だけに終



わらせるのではなく、プログラムの本来の趣旨である「異業種・異世代間の交流」を体験し、客観的な視点からイベントの運営体制や社会への効用、課題などを観察・分析する機会を、なるべく多くの学生に提供するように努めた。レポートは、A4またはB5サイズ1枚程度、1,000字程度を目安としている。1回でも活動に参加し、周囲を観察しながら深くコミットしていれば比較的容易に書けるが、ただその場において、周囲とのコミットメントを持たずに機械的に作業を行っただけでは規定の字数を埋めるのは難しい、という分量といえる。レポート作成の意思がある学生には特に、レポート作成に役立つと思われる情報（たとえば出店・パフォーマンスなどで参加協力している市民グループの活動内容など）を提供し、他の参加者とも声を掛け合いやすい状況をつくることを心がけている。

イベント終了後も、たとえば地元マスコミによる報道記事などを示し、本プログラムのねらいや社会的意義について学生が理解を深められるように配慮をしている。

## ② 教育研究の体制について

2006年度における教育研究は、甲斐朋香・松山大学法学部助教授（現・准教授）と、佐野勝久・アートNPO「QACOA」副理事長の2名による協働体制の下で進められた。

アートNPO「QACOA」は「アートと地域の橋渡しを行い、オリジナルで創造性豊かな人と地域社会の実現」を目指し、2004年8月に結成されたNPO法人である。アーティスト、デザイナー、文化施設研究者、公務員、新聞記者、教師、OL、学生などの会員30名によって運営されている。松山市三津浜地区の「アート蔵」をひとつの活動拠点として、「三津の渡し」（松山市営の渡し舟）や古民家などといった地域資源と、主として現代アートとを結びつけたイベントを、地域と協働で行ってきた。近年では、アサヒビール文化財団のメセナ活動「アサヒ・アート・フェスティバル」への参加を通じ、同じくアートと地域とを結ぶ全国各地の市民団体などともネットワークを構築している。

このような活動を通じて地域内外でのネットワークを確立したNPOとの協働体制は、学内に、より幅広い「地域資源」を呼び込むことにもつながった。また、「コミュニケーション・ツールとしてのアートの効用」という点について学生に理解を促し、より高く、より明確な目的意識を持ってイベントの企画・実施に関わってもらうためにも、スキルをもつアートNPOとの協働体制は、非常に効果的であったと思われる。

プログラムの柱であるイベントの企画・実施にあたっては、

- ・実行委員会に参加する学生の勧誘
- ・その他参加協力を依頼する市民グループなどとのコーディネート
- ・実行委員会・ワークショップのファシリテーション
- ・その他学生への助言・指導、会場設営ボランティアのコーディネートなど
- ・広報

などを2名が協働で行った。

## 2) イベント実施までの過程

イベント開催までの大まかな流れは以下のとおりである。

- ・実行委員会：11月1日、10日、16日、29日、12月8日（いずれも17：40より1～2時間程度）
- ・地上絵デザインワークショップ：11月20日（17：40より2時間程度）
- ・「紙袋を染める会」：12月9日、10日（両日ともに13：00～18：00ごろまで）
- ・地上絵ライン引き：12月16日（15：00ごろから4～5時間）
- ・当日の会場設営及び後片付け：12月17日（10：00～設営、17：00ごろ～着火、19：30ごろ～後片付け）

また、企画内容ごとの準備の手順及び参加協力者（団体）は、以下のとおりである。

### ① 灯明アートによるグラウンドのライトアップ

グラウンドに描く地上絵については、原画を地域の子供たちから募集した後に、ワークショップを開いてデザインを決定することとしている。ひとつの絵だけを選び出すのではなく、複数の絵の中からいくつかのモチーフを選び出して組み合わせるようにしている。

原画は、本プログラムが始まった2002年度より協力を得ている地域の絵画教室（柳原あや子絵画教室）に依頼した。協力依頼や絵の受け取りは、「子ども」をテーマに学んでいる学生たちが、取材・調査も兼ねて行った。学生たちは、絵画教室の主催者にインタビューを行うとともに、絵や粘土などの作品を実際に見たり、教室に来る子どもの相手をしたりしながら、子どもたちの作品と、その心理状態や発達段階との関係などを学んだ。



写真：イベント会場における子供たちの原画展示の様様

次に、ワークショップでは、佐野勝久・アートNPO「QACOA」副理事長のファシリテーションにより、集められた子どもたちの絵を並べて鑑賞し、目についた複数のモチーフの中から「統一的なテーマ」あるいはそれにつながる「キーワード」を見出していく作業を行った。2006年度は、サーカスのテントや動物、星、月といったモチーフから、「サーカス」をテーマに地上絵のデザインをすることとなった。その後、各自、トレーシングペーパーとマジックペンで、地上絵のデザインに取り入れたいモチーフをなぞる作業をした。このように手を使う作業をすることで、子どもたちが描いた線のひとつひとつが「自分の身体に入り込んでくる感じ」をつかむ。出来上がってくるデザイン画に対する愛着や、その元となる絵やそれを描いた子どもたち（その幾人かは家族とともにイベント当日にも来場する）に対する親しみを深める効果もある。

また、会場のグラウンドを画面に灯明を配置するため、メンバー全員でグラ



写真：ワークショップの様様

ウンドを実測して実際に会場の広さを実感した。

トレーシングペーパーでなぞった図柄は、スキャナーでパソコンに取り込み、テーマとバランスを考えながら配置していく。この作業は、「QACOA」のメンバーである愛媛大学教育学部の学生に依頼した。出来上がったデザイン画は実行委員会にて披露された。

デザインが確定したら、次に、地上絵に必要となる灯明の数を色別に割り出し、材料の手配を行う。イベントの趣旨から、材料の購入は、なるべく地域内で行うこととしている。

灯明のガワとなる紙袋は、大学生協を通じて入手している。現在のルートでは白色のものしか確保できないため、赤・青2色の布用染料（砥部焼作家を通じて、新居浜市在住の藍染作家より業務用サイズを購入）を用いて染める。一見非効率なプロセスではあるが、こうした単純作業は、ふだんスケジュールがあわず、実行委員会にはなかなか参加できない者も含め、学年も学部も違う学生たちが交流を深めるのに有効である。2日間の作業が終わる頃には、よそよそしかった学生同士が、お互いの顔と名前を覚え、携帯電話の連絡先を交換し、ようやく「チーム」としてのまとまりが見られるようになってくるのが通例である。

紙袋は、高齢者や子どもなどに絵や文字をかいてもらったものも、計400枚ほどあつめた。これは、小学校の余裕教室を利用した松山市の地域福祉施設「生きがい交流センターしみず」（運営：松山市社会福祉協議会）の利用者や、2006年度の出店と展示の参加協力者であるスペイン語講師の子弟が通う幼稚園や小学校の園児・児童などに、白地の紙袋をあらかじめ配布し、回収したものである。

イベント前日、重し代わりの砂（DIY店にて1トン購入。大学の同窓会を通じて会社重役のOBと連絡・交渉を行っている）をトラックでグラウンドに搬入し、地上絵の下絵描きを行う。方眼紙に落としたデザイン画を参考に、鑑賞ポイントからの実際の見え方と照らし合わせながら、主要なポイントを測量

し、釘や紐を用いて印をつけたり、ラインを引いたりしておく。地上絵の大きさは、縦横ともに60mあまりあり、使用する手作り灯明の数は、約7,000個にもものぼる。

イベント当日は朝10時より会場設営をする。実行委員の学生はもとより、当日だけの設営ボランティアも学内外より40名ほど集まり、作業をする。このようなボランティア要員には、例年、筆者の受講生やゼミ生、顧問を務める学内サークルのメンバーや、教職員有志などのほか、砥部焼作家やその友人グループ、市役所職員有志、地上絵のデザイン原画を提供した絵画教室の生徒およびその家族・知人、精神保健福祉団体の関係者など、年齢も職種も多様なメンバーが集まってくる。

2006年度は、視覚障害者ガイドヘルパー養成講座の受講生も、視察・ヒア



写真：会場設営準備の様相



写真：会場設営準備の様様

リングを兼ねてイベント準備作業に参加した。これは、後述のパフォーマンスに参加した障害福祉関係者のひとり（金村厚司・NPO「街づくりサークル・スクランブル」代表、NPO「えひめ障害者ヘルパーセンターひめヘルプ」理事長）が「コープえひめ」から養成講座の講師を依頼されたことから、いわば「相互乗り入れ企画」として実現したものである。受講生たちは、アイカバーをつけ、白い杖を手にした1名とガイドヘルパー役1名とでペアを組んで、それぞれ作業の場に立ち寄り、会場設営のボランティアとも短時間ながら交流をした。

また、松山市が愛媛大学に委託した「ボランティア手帳・カレンダー」を作成する講座（講師はアートNPO「QACOA」のメンバー2名が担当した）の受講生が、灯明の取材を行った（「愛媛大学プロジェクト型学習」に関しては、



写真：点灯後の会場の模様

アート NPO「QACOA」ブログ <http://qacoa.blog.ocn.ne.jp/artnpo/cat5701364/index.html> を参照のこと)。

## ② 出 店

出店については、地産地消・国際交流・地域福祉・アートなど、なるべくまちづくりに広く関わるテーマを持つ市民グループを中心に参加者を探し、協力をよびかけることとしている。これまでに参加協力を得た個人・団体及びその主たる活動内容については、以下のとおりである。

### ・三番町町会有志グループ

「まちづくり学講座」の市民研究助成の対象者である。松山市側と地域住民との協働により、松山市中心部の街路に桜並木をつくるなどの活動を



行っている。

- ・フリースペース「遊民館」メンバー

子どもの健全育成，若者の自立支援に関わる活動を行っている。

- ・愛媛大学学生起業家グループ「Asana Sante」：

2002年度に松山市及び松山市商工会議所が実施した学生起業家支援事業の対象者。輸入雑貨販売を行う。

- ・NPO法人「庚申庵 GCM 倶楽部」東雲女子大学生ボランティアスタッフ

江戸時代の俳人・栗田樗堂ゆかりの庵の維持管理，地域文化振興に関わる活動を行う。松山市学生政策論文がきっかけとなって発足した組織である。

- ・NPO法人「えひめグローバルネットワーク」

松山市から貰い受けた放置自転車を修理してモザンビークへ運び，武器と交換するなど，国際交流・環境保護に関わる活動を行っている。

- ・ストリートアーティスト「ひろし」

大街道アーケード内にて，絵葉書・色紙等販売を行っている。

- ・ストリートアーティスト「門田さん」

大街道にて絵葉書・小物等販売を行っている。近年では，従来迷惑行為とされてきた街角での音楽演奏や物品販売などの若者の活動も，まちに活気をもたらす要素のひとつとして見直されつつある。

- ・福祉法人作業所「しののめハウス」

精神保健福祉に関わる福祉法人「明星会」（現在はNPO法人「SORA」と組織改編されている）が運営する作業所である。通所者によるクッキー製作・販売を行っている。

- ・日印友好協会・鈴木靖彦さん

愛媛大学教員が中心となって，草の根国際交流を行っている「日印友好協会」の会員である。

- ・玉川町（現今治市玉川）道の駅「湖畔の里」有志グループ



写真：出店の模様（2005 年度若草幼稚園にて）

地産地消，まちおこしをテーマとする有志のグループである。農家直送の農産物・手作り惣菜などを販売している。

2006 年度は，「俳句集団・いつき組」有志が，毎年夏に行われている「俳句甲子園」の PR など兼ねて，おでんなどの販売を行った。また，学内のスペイン語クラス（Ines 講師）により，語学の講義と関連づける形で参加・協力を得ることができた（アルゼンチンのレシピによるカップケーキ・コーヒーの販売，アルゼンチンの風土や文化などに関する展示物）。

### ③ パフォーマンス

パフォーマンスの協力者を探す際にも，出店と同様の方針で準備を進めている。これまでのイベント実施に際しては，以下の市民グループ及び個人の協力を得ている。

- ・愛媛県立伊予高校吹奏楽部（全国高校吹奏楽コンクール全国大会受賞校）コンサート
- ・フリースペース「遊民館」メンバー ギター弾き語り
- ・地元俳人有志（『子規新報』編者）「灯明句会」
- ・愛媛大学職員・香道愛好家 聞香会
- ・NPO 法人「Velotaxi」（新型自転車タクシー）大学構内試乗会
- ・「俳句集団・いつき組」「灯明吟行会」及びテレビロケ
- ・松山大学邦楽部部長 琴生演奏
- ・実行委員スタッフによる餅つき
- ・チャンゴヨロガザ 韓国の伝統楽器演奏
- ・「流水バンド」若草幼稚園長らによるバンド演奏



写真：パフォーマンスの模様（2005 年度御幸キャンパスにて）



写真：パフォーマンスの模様（2005年度御幸キャンパスにて）

・学生によるタップダンス

2006年度は、学生バンド1組と、障害者福祉の関係者によるバンド「メゲンズ」による音楽演奏を行った。

④ 「たいせつ人フォトリレー」記録展示

2006年夏に実施されたイベントの模様をTVニュースを見た実行委員会の学生より、灯明イベントの一環として、「たいせつ人フォトリレー」の展示を行いたいとの提案があった。

「たいせつ人フォトリレー」とは、数十台の使い切りカメラを人の手から手へとリレー形式で回し、撮影された「大切な人」の写真を集めて展示するというアートイベントである。カメラと一緒に引換券もフィルムの枚数分だけあらかじめ用意されており、撮影をした人は、会場にて、自分が撮った写真を持ち



写真：「たいせつ人フォトリレー三津浜から」記録展示の様様

帰ることができるようになっている。2005年より、松山市内の額縁製作工房「額師・風雅」のメンバーが主催して始めたもので、初年度は市内のギャラリーにて、次年度は、アートNPO「QACOA」がアサヒビール文化振興財団より支援を受けて行ったアートイベント「三津浜アートの渡し」の一環として、松山市三津浜の空き店舗「池田商店」にて、写真展示を行っている。

2006年10月末ごろより、発案者の学生と共同研究者とで、このアートイベントの主催者である額製作工房「額師・風雅」のメンバーを訪れ、協議をした。その結果、「フォトリレー」は2007年度に改めて共同開催のかたちで行うことを決定した。2006年度はその「予告編」も兼ねて、「風雅」とアートNPO「QACOA」が2006年夏に松山市三津地区にて共同開催した「たいせつ人フォトリレー」の記録展示を行った。写真展示に用いた木枠に、使い切りカメラに



写真：「たいせつ人フォトリレー三津浜から」記録展示の様様

一台一台貼付するキャラクター（写真を引き取るときの識別用と、不特定多数の人の手に渡るカメラに愛着を持ってもらい、返却率を高めるため）のイラストや、イベントの準備の様様や写真展示の様子を写した記録写真、実際に用いたカメラセット（カメラの識別番号やイラストのシールを貼ったファイルケース、使いきりカメラ本体、イベントの趣旨や参加方法などを記した取扱説明書など）などを貼付し、展示した。イベント当日は「額師・風雅」のメンバーも会場に待機し、展示の見学者に説明を行ったり、「ミーツ・アーツ・オープンカレッジ」の参加者と意見交換をしたりした。（執筆：甲斐朋香）

⑤ 「ミーツ・アーツ・オープンカレッジ」

「ミーツ・アーツ・オープンカレッジ」とは、アートNPO「QACOA」が2006年度に開催した、5回シリーズの連続講座である。「地域とアート」について



写真：「額師・風雅」工房におけるミーティングの様様

優れた見識と経験を持ち、最先端の現場に立つ講師を全国から招聘し、オープンカレッジ方式で勉強会を重ねることで、アートの社会的な関わりを模索し、地域と橋渡しが出来る繋ぎ手となる人材を育てること、「QACOA」が参加者と共に成長し、個々のスキルとネットワークを広げること、などを目標に開催したものである。

松山大学にて灯明イベントと同日に開催された第2回目の講座は、214番教室にて13:00~17:00まで行われた。一部は講演形式でアートと地域について「学ぶ」、二部は参加者との「対話」によって「考える」ワークショップ形式で行った。

講座終了後、カルフルに会場を移し、講師、参加者達が灯明を楽しみ、学生達との交流を深めた。



写真：「ミーツ・アーツ・オープンカレッジ」第5回の模様（2007年3月11日コムズにて）

松山大学での講座開催は、ただ単に場所を借りることができたというだけでなく、「QACOA」と灯明イベントに参画する学生達の協働で、灯明イベントと参加者を橋渡しすることが出来たという点において、意味があったものと思われる（「ミーツ・アーツ・オープンカレッジ」に関しては、アートNPO「QACOA」ブログ <http://qacoa.blog.ocn.ne.jp/artnpo/2006/12/index.html> を参照のこと）。

（執筆：佐野勝久）

#### ⑥ 交流会

実行委員の学生たちより強い要望が上がり、2007年2月4日に再度グラウンドでのライトアップと、ボランティア参加者有志による交流会を開催した。イベントの開催当日だけ参加する会場設営ボランティア同士や、出店・パフォーマンス協力者と実行委員会・会場設営ボランティアとの交流という例年の課



題に、わずかながら応えるものとなった。

### 3) 地域への働きかけ

本プログラムの実施に際しては、学生の「学び」を支えてもらうため、地域の協力体制が必要不可欠である。昨今では、各種市民活動団体を装った、いわゆるカルト教団による被害の危険性も考えられる。安心して学生を地域へ出すためには、常日頃から地域と関わり、新しい情報も掴んでおくことも、共同研究者の役割のひとつといえる。

一方の共同研究者である佐野勝久は、以前より、アートNPO「QACOA」副理事長としてアートと地域とをつなぐ活動が続けてきた。また、インテリアデザインという自らの専門的なスキルを活かし、砥部町の砥部焼や今治市菊間の菊間瓦、四国中央市の水引、内子町五十崎の和紙、宇和島の真珠など、県内の様々な伝統産業の振興にも関わっている。このような活動を通して得られた知見や、培われた人的ネットワークは、プログラムに参加した学生にとっても非常に有益なものであったといえる。

他方、大学関係者に対しては、一般に、地域との密着を喧伝しつつも実践に欠けるとの指摘もしばしばなされる。この点に鑑みて、青年会議所が主催する「俳句甲子園」（8月19・20日、大街道アーケード、愛媛県武道館にて）、松山市社会福祉協議会主催の「福祉センターまつり」（11月18日・19日、松山市総合社会福祉センターにて）など、地域の市民活動団体が主催する種々の催し物などには学生とともに積極的に参加・協力をするように心がけた。

### 4) 他地域における事例調査

#### ① 「博多部灯明ウォッチング」の視察・参加

前述したとおり、このプロジェクトの中で実施するイベントの内容は、福岡市博多部の事例からヒントを得ている。そこで、2006年10月には、例年と同様に、ゼミ生の中から参加希望者を募り、「博多部灯明ウォッチング」の視察

およびヒアリングを行った。

イベントの準備に自らも参加し、交流を深めるなかで、学生たちは、地域住民のまちづくりに対する熱意や、地域における合意形成の難しさについて、実感することが出来たようであった。このイベントには、福岡市職員も、その地域に関わる部署を異動した後も継続的にボランティアとして参加している。このため、学生にとっては、地域と関わりつつ自ら考え、行動する地方公務員の姿に触れる貴重な機会ともなった。また、「先進事例」に触れる体験は、イベントがまちづくりにもたらす効用や、学ぶべき運営の手法、自らの課題などについて、学生たちが主体的に考えるためのヒントを与えるものであったと思われる。

一方、博多部の地域住民や行政の関係者にとっても、自らの地域のイベントに遠方から大学生が来訪し、汗を流してくれるという事実は、大きな励みとなるようである。

## ② 「延岡灯明」の視察及びヒアリング

2007年3月には、宮崎県延岡市における灯明イベントの視察・ヒアリングを行った。これは、「博多部灯明ウォッチング」を企画・実施の中心となってきたNPO法人「博多まちづくり」が、延岡市から委託を受けて実施した「戦略的中心市街地活性化事業」の一環である。

延岡市では、NPO法人「博多まちづくり」や「九州大学ユーザーサイエンス機構」、「博報堂」のコンサルタントなどとの協働により、勉強会や住民アンケートなどを実施し、地域の現状と課題を抽出する作業が行われてきた（その成果については、NPO「博多まちづくり」公式HP <http://www.hakatabu.net/page026.html>などを参照）。また、2007年3月には、中心市街地活性化の目玉として、カフェや衣料品店などと、公設民営の託児所「子育て交流広場・まちなかキッズホーム」、コミュニティセンターなどが併設された複合施設「ココレッタ延岡」がオープンした。「延岡灯明」は、商店街が中心となって開催した施設オープン記念イベントのひとつとして、延岡駅前広場や山下商店街、今山神



写真：延岡におけるイベント準備の様様

(NPO「博多まちづくり」HP <http://www.hakatabu.net/page046.html> より取得)

社に続く石段などを、3月30日、31日の両日にライトアップするというものであった。実施に当たっては、地元の商店街関係者や、延岡商業高校（文部科学省により「目指せスペシャリスト」研究指定校とされた全国の商業高校7校中の1校であり、商店街の空店舗に出店するなど、様々なかたちで地域との連携プログラムを展開している）や聖心ウルスラ学園高校などの教師および生徒などが、会場設営や後片付けにボランティアとして大勢参加していた。人口減少・高齢化が進む（延岡市の人口構造については、20～24歳の人口が著しく低いことが指摘されている）地方都市において、高等学校が（生徒や教員の個人的な熱意だけに頼るのではなく）ある程度組織的な体制を確立してまちづくりに関わっているという延岡市の事例は、教育機関と地域との連携のあり方を考える上でも参考となるものと思われる。

## 4. 分析—成果と課題

### 1) 学生に対する教育的効果

活動に参加した学生のレポートや事前・事後の聞き取りでは、さまざまな人と出会う楽しさや達成感などへの言及が複数見られた。ごく少人数にはとどまっているものの、イベントの準備を通じて、ゼミのテーマにつながるヒント

を得たり、市民活動に参加したりするようになった学生も数名いる。本プログラムに継続的に参加協力しているいくつかの市民グループも、実行委員会やゼミの学生たちには徐々に知られるようになってきている。こうしたことから、学生のコミュニケーションスキル向上や、地域・まちづくり・市民活動への関心の高まり、異職種・異世代間コミュニケーション促進への寄与といった点については、一定程度の効果があったといえよう。

一方、学生に対する教育効果という点にかんがみれば、準備のプロセスやイベントの社会的意義についても学生自らが客観的に評価・分析し、情報発信する能力を育てることも重要となろう。学生自身も、たとえば就職活動に際して、エントリーシートの作成や自己分析などを行うのを契機に、そうした評価・分析作業の必要性を一定程度認識するようになるようである。また、2006年度においては、放送研究会部員の学生が、自主制作番組の題材として、また、愛媛大学のボランティア講座の受講生が「ボランティア手帳」作成の取材対象のひとつとして、このプロジェクトを取り上げている。これらの取材をする側はもとより、取材を受ける側の学生たちも、単にイベントを実施するだけでなく、その社会的意義についても自分なりに考え、他者に伝えることの重要性を意識するようになったようである。実行委員会や設営ボランティアは自主参加を旨としている以上、限界はあるが、ゼミや講義などの学習内容とも関連づけながら、より発展的な学習につなげていく工夫も必要であろう。

## 2) 大学と地域との連携・ネットワーク形成

地域のまちづくりネットワークの確立・強化は、本プロジェクトが最終的にめざすべき大きな目標といえる。現在、全国各地であかりを用いた同様のイベントが開催されている背景を探ると、この種のプロジェクトが、まちづくりのための一種のツール(手法)としても期待されていることがわかる。事実、「博多部灯明ウォッチング」を企画・実施してきたNPO法人「博多まちづくり」のもとへは、高層住宅の建設によって新しい住民が大量に流入し、旧住民との

融合という課題を抱えている住民グループや、記念行事や観光の目玉として住民参加型イベントを企画したい地方自治体などから、問い合わせや協力依頼が数多く寄せられている。

松山においても、おそらくは同種の問題関心から、イベントの体験に関する講演や執筆などの依頼も増えてきている。以下は、2006年度に学外からの依頼を受けて実施したものである。

- ① 託老所「あんき」（松山市西垣生町）にて灯明ワークショップ（7月22日、29日）

NPO 法人「タイムダラー・ネットワーク・ジャパン」（※現在は解散）が異世代間交流や地域福祉などを目的として主催した「心のテーブル」事業の一環として、ワークショップを開催した。参加者は、地域に在住する施設サポートメンバーや、事業の対象者でもある小中学生など10数名であった。2回目のワークショップは、施設主催の「夏祭り」と同時開催であったため、近隣住民も多数来訪した。

「あんき」は地域に密着した託老施設の先駆的事例として、福祉関係者の間では高く評価されている。こうしたことから、ワークショップ開催に際しては、広く学生にも参加協力を呼びかけた。その結果、第1回目のワークショップには、福祉関係のNPOをテーマに卒業論文を執筆するという学生1名が参加し、施設内を見学するとともに、施設の職員やボランティアサポートメンバー、利用者などに対してヒアリングを行った。

なお、ワークショップ開催当日の様子は、福祉関係の専門誌『月刊福祉』にも紹介されている。

- ② 技術士センター主催講演会「まちをあるく・ひとをつなぐ～わたしのまちづくり体験論」（11月10日 松山市三番町コムズにて）

愛媛県内の土木系の技術者を対象とした職員研修の一環として、上記のタイトルにて講演を行った。参加者は約40名。

- ③ 愛媛県地域政策研究センター『舞たうん』原稿執筆

財団法人「愛媛県地域政策研究センター」が発行する雑誌に執筆した。県内のさまざまな女性に執筆を依頼し、自らが関わる市民活動について、各自2回にわたり紹介してもらうというシリーズの一環である。上記の雑誌は、県内各市町などに配布されている。

一方、プログラムの運営体制については、既に昨年度の助成プログラム報告書において、以下のような点を課題として挙げている。

- ① 現在はどちらかといえば特定の個人を中心とした放射線状となっているネットワークを、参加者同士の横の連携強化によって網目状のものに近づけていくことが重要であろう。
- ② 現在は季節限定型ともいうべきかたちの参加者間のネットワークがより恒常的に機能し得るよう、新たな展開が望まれる。
- ③ 現在のネットワークは、いわば「志縁」偏重ともいうべきかたちとなっている。すなわち、参加者の層が、従前より市民活動やまちづくりに関する理解や問題関心を一定程度共有している人々に限定される傾向が見られる。とくに大学周辺の地域へもより幅広く働きかけ、「志縁」と「地縁」のバランスがとれた人的ネットワークの構築が望まれよう。また、現在は、大学主体の企画に地域を巻き込むかたちとなっている。イベント本来の趣旨からすれば、将来的には、大学側が側面支援を行い、地域主体の企画の誘発をもたらすようなあり方へのシフトも、考慮に入れる必要がある。

上記の観点からすれば、たとえば、本プログラムをひとつの契機として、「生きがい交流センターしみず」と学生との間に一定の協働関係が確立しつつあることは、ささやかな成果といえよう。施設見学→学生ボランティアスタッフとして活動→施設利用者に対するイベントの案内・協力要請→交流 といったサイクルの中で、学生が、子どもや高齢者の問題、教育、地域福祉など、様々な角度から、調査研究のタネを見つけることができる体制が整いつつある。一方、様々な「地域資源」のひとつとして学生層を呼び込みたい施設の側にとっても、より幅広く学生と接触する機会ができることは、一種のメリット

といえる。

現在、「ガバメントからガバナンスへ」あるいは「学校と地域との融合」といったスローガンの下、一定程度のスキルをもつ市民活動団体の多くは、行政や教育関係者から「協働」を求められる機会も増えてきている。しかし、そのコスト（＝時間やエネルギー）に見合うだけのベネフィット（金銭的・物質的報酬のみを指すのではなく、達成感などの精神的な要素も含む）を常に還元されているとは言い難いとの批判も、市民活動団体の間には根強くあるのが実情といえる。他方、昨今の社会的風潮においては、学生などに対し、「ボランティア」「社会貢献」などの名目で、比較的安易に無償の労力提供を期待する傾向も、ごく一部では見受けられるように思われる。こうした状況の下で、地域の信頼を得、まちづくりに資する人的ネットワークを確立するためには、一定の時間と労力とが必要となろう。上述した他地域の事例なども参考にしつつ、さらに研究及び実践活動を積み重ねていく必要があるものと思われる。

（執筆：甲斐朋香）

●写真：アートNPO「QACOA」

NPO「博多まちづくり」

NPO「庚申庵 GCM 倶楽部」

佐野勝久（アートNPO「QACOA」副理事長）

鈴木雅子（愛媛大学学生）

風雅フォトリレープロジェクトチーム

前田眞（NPO「まちづくり支援えひめ」代表）